様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　９ 日現在

機関番号：１２６０８
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ１３３１７

研究課題名（和文）第二次大戦下ドイツ系亡命者の対独ラジオプロパガンダ参加経験とその影響

研究課題名（英文）German exiles' experiences of participating in radio propaganda against NS-Germany during World War II and its meanings

研究代表者
鈴木　健雄（Suzuki, Takeo）

東京工業大学・リベラルアーツ研究教育院・講師

研究者番号：８０７９２３７４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、イギリスの対独ラジオプロパガンダに関わった亡命者の事例をもとに、第二次世界大戦中の経験が、戦後の言論活動にどのような影響をもったのかを検討しようとするものである。本研究では研究対象とする期間を、当初予定していたものよりも延長することで、より長期的な思想的連関を明らかにしようとした。代表的事例である、ISKとNeu Beginnenの事例を検討することで、両者の1920/30年代における思想が、第二次世界大戦後の西ドイツにおける社会民主主義の中心思想の一部を準備していたことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
今日、1950年代以降の思想的発展に際して、戦間期に端を発する思想潮流が大きな意味をもったことが知られている。新自由主義の思想がその代表事例であるが、本研究が対象とする社会民主主義の思想もまた、その一つであった。本研究は、亡命者とラジオプロパガンダという点に着目しつつ、そこに関わった関係者の思想を、20世紀初頭にまで遡り検討し、その結果として、第二次世界大戦後の思想的展開の端緒を探ったという点で学術的な意義をもつものである。今日、新自由主義が行き詰まりとそこからの転換が求められる中で、この成果は、その代替物を検討する手がかりを与えるものであり、その点で、社会的意義をもつ。

研究成果の概要（英文）：Based on the case of exiles involved in British radio propaganda against NS-Germany, this study sought to examine how their experiences during World War II influenced their postwar activities. By extending the period of study beyond that originally planned, this study attempted to clarify longer-term ideological linkages. Through examining the representative cases of the ISK and Neu Beginnen, this study showed that their ideas in the 1920s/30s prepared some of the central ideas of social democracy in post-World War II West Germany.

研究分野：ドイツ近現代史

キーワード：ドイツ系亡命者　反ナチス抵抗運動　ラジオプロパガンダ　心理戦　小規模社会主義組織　ISK　Neu Beginnen　レオナルト・ネルゾン

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

第二次世界大戦期、英米を中心とする連合国の対独「心理戦」にヒトラー政権下祖国を離れたドイツ系亡命者が複数参加していたことはよく知られている。プロパガンダ等の手法を用いて、敵国の士気を下げることを目指す心理戦の遂行に必要不可欠な存在として彼らは、情報提供者や分析家、翻訳者、通訳といった形で参加する。同時期の心理戦と過去のそれとを分かつ存在として、ラジオの積極的利用が挙げられる。国境線や制空空域の制限を超えて、自国の主張を相手側に届けることのできるラジオは、従来の紙媒体や流言飛語によるプロパガンダに比して、より広範な影響力をもつものとして、先にドイツ、次に連合国によって採用される。ラジオプロパガンダにも複数の亡命者が参加していた。

連合国によるラジオプロパガンダへの亡命者の参加という枠組みで、これまで検討対象とされてきたのが、トマス・マンやフランツ・ノイマン、ハンス・ハーベといった著名な文学者、学者、ジャーナリストの事例である。特にマンによる BBC ドイツ語放送でのラジオ演説については、その内容だけでなく前後の文脈や、演説がもたらした反響等について、多くの先行研究がある。また、亡命者を登用したイギリスの「政治戦争執行部」（PWE）や PWE に大きな影響力をもった同国労働党、あるいは BBC といった連合国側機関・政党・放送局の対応もまた、考察の対象とされてきた〔例えば、Charmian Brinson and Richard Dowe (eds.), *„Stimme der Wahrheit“. German-language Broadcasting by the BBC,* Amsterdam/New York 2003 等〕。しかしながら、これらの研究はあくまで卓越した個人あるいは機関のみに着目したものであり、分析視点もいずれか一方に偏っていた。また考察期間も第二次世界大戦中に限定されている。集団に焦点を当て、そこでの経験の意味を同大戦後まで視野に入れつつ検討した研究は、管見の限り存在しない。これは個人史の枠内から検討が加えられてきた結果、集団として把握されてこなかったこと、あるいは連合国側史料に依拠し過ぎたことが理由として考えられる。

ラジオプロパガンダに参加した集団という点について、これまでの研究の中で、複数の亡命社会主義者団体から、中心的人物が複数、ラジオプロパガンダに加わるとともに中心的な役割を担っていたことを明らかとしてきた。また、その過程でそのうちの複数人が、戦後、ドイツの西側占領地域においてラジオ放送再建の中心人物となったことが明らかとなった。さらに、彼らにとってそこでの経験が「反ナチス抵抗運動」の転機に位置するものであったことが示唆された。しかし、ラジオプロパガンダへの参加が具体的に、どのような意味合いをもち、それが戦後ドイツでの活動にどう繋がったのかのは、解明できていない。

このような学術的背景のもと、本研究では、以下の 3 つの「問い」について検討しようとした。① 亡命者による「反ナチス抵抗運動」という観点からみたとき、ラジオプロパガンダはどのような意味をもつものであったか。② ラジオプロパガンダでの経験は、そこに参加した亡命者らの戦後ドイツでの活動にどう繋がったのか。③ 「ラジオ」並びに亡命者という観点から、1945 年を挟んだトランス・ナショナルな思想史は描けるか否か。描けるとしたらどのような性質を備えたものとなるか。本研究では、これらの問いを検討することで、対独ラジオプロパガンダでの経験が、亡命者集団並びに個人にとってどのような意味をもち、戦後ドイツでの活動にどう繋がったのかを明らかにしようとした。主たる検討対象は、社会主義組織「国際社会主義闘争同盟」（ISK）及び「新規蒔き直し」（Neu Beginnen）の構成員の事例である。両組織は小規模ながら、1930 年代の出版メディアを中心とする反ナチス抵抗運動の中で社会民主党と並んで中心的な役割を果たしたことで知られている。また主要メンバーの多くが、BBC ドイツ語放送並びにイギリス労働党が創設に関わった「欧州革命放送」に参加していた。対象時期は、1940 年代初頭のプロパガンダ参加以前、30 年代後半から、戦後東西ドイツが成立する 1949 年までである。

２．研究の目的

本研究の目的は、対独ラジオプロパガンダに参加したドイツ系亡命者の集団を手掛かりに、1930 年代後半から 1949 年にかけての彼らの活動と思想の中に、ラジオプロパガンダでの経験を位置付けることで、同時期の言論空間の形成過程の一端を解明しようとするものである。

本研究が対象とする集団、個人に対しては、これまで専ら、社会主義運動史の文脈から検討が加えられてきた。しかし、ラジオプロパガンダへの参加という文脈においては、彼らが果たした重要性や与えられた権限に反して、十分な考察が加えられてこなかった。従来ややもすると等閑視されてきた主体を捉え、反ナチス抵抗運動という彼らにとって重要な争点を視野に入れつつ、連合国の対独ラジオプロパガンダを捉えようとする点で、本研究はこれまでにない試みといえる。また、ISK のフリッツ・エーバーハルトや Neu Beginnen のリヒャルト・レーヴェンタールといった、戦後西ドイツのラジオ放送並びにジャーナリズムの復興に関わった人物を対象化することで、亡命期と戦後の経験とを接合することを試みる。これは、近年ドイツにおいて盛んでありながら日本では研究の薄い「帰還者」研究の潮流に位置づくものである。その点で本研究は、ドイツ史をヨーロッパ史の文脈から捉え、1945 年という「切れ目」（Zäsur）を超えた歴史叙述を目指すものである。ここでの検討の成果は、ひいては民主社会主義的な思想に基づく言論

空間が、戦後のヨーロッパでどのように生じたかという問題の解明に繋がることが想定される。

３．研究の方法

本研究では、当初、（i）連合国の対独プロパガンダの中で、亡命者がどのような位置づけにあったのかの確認〔機構・組織面での検討〕、（ii）ラジオプロパガンダ参加時期の亡命者の活動と思想の確認〔思想面での検討〕、（iii）対象とする亡命者の、ラジオプロパガンダ以前と以後の時期における活動と思想の探索〔前後の文脈の探索〕、（iv）（iii）の結果と（ii）での考察結果との照らし合わせ〔総合考察〕、という順番で調査・検討することで、上述の①～③、3 つの「問い」にアプローチすることを構想した。

しかしながら、研究の中心となる期間において、covid-19 の世界的流行により、海外渡航が困難となったことと合わせて、研究代表者の所属期間の変更の時期が重なり、残念ながら国外での資料調査を実施することができなかった。そのため、文書史料ではなく、刊行史料および同時代文献を蒐集・調査することで、当初の目的に応えようとした。また、研究の進展とともに、第二次世界大戦中の亡命者らの言論活動を検討する上で、世界大戦以前に培った思想、人的ネットワークが重要となることが判明した。そのため、研究対象とする時期を、20 世紀初頭から 1945 年の第二次世界大戦の終結までと前倒しするとともに、拡張することにした。

４．研究成果

本研究の成果は以下の 4 点にまとめられる。

(1)　イギリスの対独ラジオ・プロパガンダに関わった人物の確認とその量的な整理

本研究の前提として、イギリスの対独ラジオプロパガンダにどのような背景をもった人物が関わり、そのうち、本研究が対象とする ISK、Neu Beginnen に背景をもつ人々がどの程度含まれどのような役割を担っていたかを確認する必要があった。そのため、本研究では、かつてコンラート・プッターが著した、イギリスの対独ラジオプロパガンダに参加したドイツ系亡命者に関する資料集をもとに、イギリス BBC で活動した 123 名の亡命者の経歴、職業、ラジオ放送内の役割を数量的に整理した。その結果、政治家のうち 4 人に 1 人が ISK、Neu Beginnen の関係者であることが確認された。またその多くが、労働者向け番組の編集者やアナウンサーとして関わっており、BBC の労働者向けプロパガンダ放送に関係したものの半数を占めていることがわかった。この作業により、ISK と Neu Beginnen の構成員が、BBC の労働者向けプロパガンダ放送の主たる構成員だったことが明らかとなった。

(2)　ISK の構成員の思想分析と、その創始者レオナルト・ネルゾンの影響力の確定

BBC のラジオプロパガンダのうち、労働者向け番組を主に担当していた ISK および Neu Beginnen の構成員のうち、ISK の構成員がどのような思想をもち、本研究課題の対象時期においてどのような主張を行なっていたのかを確認した。1930 年代および 1940 年代に ISK およびその構成員が発行・公開した機関誌および同時代文献を中心に蒐集・分析することで、ISK とその構成員にとって、創始者レオナルト・ネルゾンの思想が極めて重要な役割を果たしていたことが確認された。

20 世紀初頭からネルゾンが没する 1927 年までのその思想、および、ISK とその前身組織 IJB の主張を確認した結果、以下のことが明らかとなった。従来「社会主義者」として理解されることの多かったネルゾンは、元々左派自由主義陣営に属し、人間理性の力に基づき道徳的な社会を構築するという、哲学的思弁に基づく左派自由主義の立場にあったこと、そして、第一次次世界大戦とロシア革命の勃発を機に、社会主義を標榜することになったこと、である。

この結果をもとに、ISK の構成員に対するネルゾンの思想的影響力を検討した。その結果、組織が社会主義組織を標榜するようになった過程と、それ以前に青年運動組織を標榜していた頃からの思想・運動面の連続性と非連続性を明らかとした。その上で、ネルゾンおよび IJB／ISK の思想の変化を、同時期のドイツ社会主義の思想的拡大という観点から考察し、戦後における SPD の「国民政党化」を準備した一事例として理解できるのではないか、という展望を示した。

(3)　Neu Beginnen の思想的特徴の考察と、人的ネットワークの連続性の整理

Neu Beginnen の 1930 年代初頭の思想を確認し、小規模幹部政党としての特性、そして史的唯物論の否定という観点のもと、ISK とも対照させつつ検討することで、同組織の小規模社会主義組織としての役割ならびにプロパガンダとの親和性を確認した。また、設立期を扱った古典的研究を取り寄せるとともに最新の研究を蒐集、1930 年代における活動・人的ネットワークが、戦中戦後にかけていかに接合されていったのかについて追った。

以上の過程で、Neu Beinnen を同時期の他の社会主義組織から分かつものとして、伝統的な史的唯物論からの逸脱と「主体性」への着目という特徴があったことを明らかにした。そして、1920/30 年代、ISK と Neu Beginnen 両者が、SPD、KPD という二大社会主義政党に対してどのような批判を浴びせ、「第三極」としてどう振る舞おうとしたのかを検討した。上記の観点については、同時代における G・ルカーチやオーストロ・マルキシズムの論者による議論と対照させて検討すべきものであり、現在その検討中である。

(4)　デジタル・ヒストリーの手法の調査・研究の成果

本研究課題の期間はちょうど、covid-19 の世界的流行と海外への渡航制限が深刻化した時期であった。その状況下、現在保有する史資料をどうすれば有効に利活用できるかを探究すべく、他の研究者有志とともにデジタル・ヒストリーの手法の調査・研究を行い、その成果を学会発表という形で公開した。

上記（1）～（4）の研究成果は、各種論文や、共編著書籍、学会報告という形で公開した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 鈴木健雄	４．巻 9
２．論文標題 ドイツ社会主義の「倫理的な基礎づけ」の起源に関する一考察 ： レオナルト・ネルゾンの哲学とIJB/ISKの政治的立場に着目して	５．発行年 2019年
３．雑誌名 世界史研究論叢	６．最初と最後の頁 23-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 鈴木健雄	４．巻 16
２．論文標題 第一次世界大戦前後におけるドイツ社会主義の思想的拡大－－「倫理的自由主義者」レオナルト・ネルゾンの事例をもとに	５．発行年 2023年
３．雑誌名 ゲシヒテ	６．最初と最後の頁 19ー31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 鈴木健雄
２．発表標題 論文紹介（鈴木健雄「ドイツ社会主義の『倫理的な基礎づけ』の起源に関する一考察－レオナルト・ネルゾンの哲学とIJB／ISKの政治的立場に着目して」『世界史研究論叢』第9号、2019年、23-35頁。）
３．学会等名 世界史研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 鈴木健雄
２．発表標題 1910／20年代ドイツにおいて青年運動家たちが「社会主義者」になる過程－IJB（国際青年同盟）／ISK（国際社会主義闘争同盟）の事例を中心に－
３．学会等名 ドイツ現代史研究会
４．発表年 2020年

１．発表者名 河合竜太、東風谷太一、鈴木健雄
２．発表標題 既存のデジタル・アーカイブとツールを活用したドイツ史研究の可能性と課題－社会ネットワーク分析の視点から－
３．学会等名 日本デジタル・ヒューマニティーズ学会（JADH） SIGLITH第1回研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 鈴木健雄
２．発表標題 双方向的プロパガンダと媒体の変容－ドイツの事例を中心に－
３．学会等名 産官学スタディセッション
４．発表年 2019年

１．発表者名 鈴木健雄
２．発表標題 「倫理的自由主義者」レオナルト・ネルゾンとその社会主義への「転向」 －第一次世界大戦前後におけるドイツ社会主義の思想的拡大の一例として－
３．学会等名 「歴史と人間」研究会 第275回例会
４．発表年 2023年

１．発表者名 鈴木健雄
２．発表標題 ドイツ・ヴァイマル期の倫理的社会主義組織IJB／ISKとカトリック教会 －教会の公教育への介入をめぐって－
３．学会等名 西洋近現代史研究会
４．発表年 2023年

〔図書〕　計1件

１．著者名 新谷 卓、中島 浩貴、鈴木 健雄 編著	４．発行年 2021年
２．出版社 彩流社	５．総ページ数 216
３．書名 歴史のなかのラディカリズム	

〔産業財産権〕

〔その他〕

鈴木 健雄 (Takeo Suzuki) - マイポータル
https://researchmap.jp/takeo_suzuki

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関